

## JOMF 派遣医師便り (2014. 9)

### ◆ジャカルタ◆

## インドのくすり

JJC 医療相談室

原 稔

インドに行く機会がありました。昔の同僚に誘われたものです。

3人での道中、4日目に1人がお腹をこわしました。下痢に加え、上腹部痛と発熱があります。感染性腸炎かなと、手持ちの薬を出そうとしたところ、現地のガイドが「インドの下痢に日本の薬は効きません。私に任せなさい」と自信満々。「インドネシアの薬なんだけどなあ」と思いつつ、職業は明かさず彼に従いました。お手並み拝見です。

彼が町中の薬局で買ってきた薬は3種類。

- ① 二つの抗生物質(Norfloxcin, Tinidazole) と消化管内のガスを抑える薬が  
いっしょくたになったもの。
- ② 消炎鎮痛剤に消化管の痙攣を抑える成分が合わさったもの。
- ③ 電解質補給用の粉ジュース。

Norfloxcin の日本での名前は「バクシダール」。細菌性腸炎の治療薬として使われます。もちろんそれ以外のいろいろな感染症に対しても有効で、腸チフスにも効果があります。

Tinidazole は日本で発売されていません。替わるものは「フラジール」。これはアメーバ赤痢を含む寄生虫の治療薬です。

つまりは、Norfloxcin と Tinidazole の2剤で、細菌性腸炎に加え腸チフスとアメーバもカバーすることになります。強力な処方内容です。現地ガイドの自信の根拠はここでしょう。

①②③の組み合わせは、カレーのように何でも放り込んだインド的処方とも言えますし、大陸的という表現もできます。島国育ちの自分としては、もう少し繊細な処方を望みますが、必要な検査をする手立てがありません。

結果はと言いますと、効きました。「郷に入れば郷に従え」でしょうか。抗生剤はバクシダールだけでも充分であったかもしれませんが、比較のしようがありません。

処方箋なしでこのような薬が購入できるのはインドネシアも同様ですが、ジャカルタで同じことはしないでください。